

ミライのフツーツーに 向かって

山村と都市が共存する豊田市で、どんなミライをめざしていくのか。そのミライのフツーツーをどのように創っていくのか。おいでん・さんそんセンターを運営する(一社)おいでん・さんそんの正会員に想いを語ってもらいます。

第5回 西村 新さん

株式会社こいけやクリエイティブ代表取締役&デザイナー、人生を耕すためのライフスタイルマガジン「耕Life」編集長、とよたプロモ部代表、なんかしたい相談所所長、こいけや養蜂園養蜂家



ミライを考える際、死のことも考えます。

なんとなくずっと続きそうな気もする暮らしですが

ある日突然死んじゃうこともあります。

限りある命、日々の暮らしを大切に生きていかねばと思いますが

あんまり必死になっても疲れちゃうので

バランスよく、ほどほどがいいかなと思っています。

大切にしていることは、感謝の気持ちをもって暮らすこと。

家族や友人、仲間たち、お客さんなど関わる人々もそうですが、

美味しくご飯が食べられること、水が飲めること、

お日様のあたたかさ、木々の緑や風の気持ちよさなど

何気ないことにも感謝です。

地球が丸いのも、太陽との距離感にも感謝です。

僕らは全て絶妙なバランスの中で生かされてるなぁと思います。

自分が死ぬときは可能なら目の前の人に「ありがとう」って言って

死にたいなぁと思っています。誰もいなかったらその時目に見えたもの

に心の中でありがとうって言いたいな。

とはいえ、娘もまだまだ小学生ですし長生きはできたらしたい。

次の世代を担う子たちにちょっとでも良い環境をのこす力にはなり

たいなと思います。

当たり前が当たり前じゃなくなってきた世の中ですが

何気ないことに感謝できる心持ちで

日々ていねいに暮らしていきたいですね。

感謝感謝。

イベント情報

寶榮座寄席 微笑亭さん太@農村舞台寶榮座

●日時 2022年9月24日(土) 14:00開演(開場:13:00) ※小雨開催

●会場 農村舞台寶榮座(諏訪神社境内 豊田市怒田沢町平岩5)

●入場料【全席自由】500円(中学生以下無料) ※会場受付にて支払い

●内容 寶榮座寄席 微笑亭さん太

(プロフィール) 大学在学中は落語研究会に所属し、

卒業後、豊橋落語天狗連に参加。平成16年『第1回・

全国落語台本コンクール』にて、1048本の新作落語

台本の中から、自作『身投げ橋』が最優秀賞を獲得。

以来、プロの落語家に定期的に落語台本を提供する

作家活動のかたわら、自らも年間250回に及ぶ高座に上がり続け、平成

21年8月には、『社会人落語日本一決定戦』において、362名の社会人落

語家の中から3位入賞を果たし、翌年は奨励賞、平成25年には藤本義一

賞を受賞。

●備考

*新型コロナウイルス対策のため、ご来場の際は以下ご協力ください。①

入場時の検温②マスクの着用③入場時の手指消毒④会場内の適切な距離

●問合せ 農村舞台寶榮座協議会 TEL 090-5875-9717(加納)

●協力 萩野自治区・萩野NPO結の家・株式会社オーフ



あすけ聞き書きフェス2022

わくわく事業を活用し、足助のお年寄りの生き様を話し言葉で綴った足

助の聞き書き第8集・第9集と朗読集の完成報告会として『あすけ聞きフ

ェス2022』を開催

●日時 2022年9月11日(日) 13:30~15:30

●会場 ホテル百年草1階ささゆりの間(豊田市足助町東貝戸10)

●入場料 無料(行動制限等が実施された際はオンラインでの参加をお

願いします。) *オンライン参加も可能

(詳細は後日こちらに掲載予定)

●内容

*あすけ聞き書きフェス開催趣旨&活動報告

*足助の聞き書き第8集・第9集、朗読集の完成報告と

作品紹介

*当日、販売も実施【聞き書き集1,000円、朗読集1,500円】

●備考

*新型コロナウイルス対策のため、ご来場の際は以下ご協力ください。①

入場時の検温②マスクの着用③入場時の手指消毒④会場内の適切な距離

●問合せ あすけ聞き書き隊事務局 TEL 090-8732-6308(高木) メール

アドレス kgt@asuke.org

●協力 エフエムとよた株式会社、NPO法人「共存の森ネットワーク」、

ホテル百年草、合同会社アサノエンタープライズ



「つながる力でミライを変える」おいでん・さんそんセンターの活動をご紹介します!

おいでん・さんそんSHOW

8月号
2022.08.01発行

PICK UP

農業と他の仕事を組み合わせるライフスタイルの実践例から考える生き方



「はじめよう!半農半Xな暮らし」オンラインセミナー開催



(右上)半農半X研究所 塩見直紀さん(左下)てくてく農園 横江克也さん(右下)Burupon 辻竜也さん(左上)おいでん・さんそんスタッフ 木浦

はじめよう!半農半Xな暮らし

「半農半X」という言葉を聞いたことがありますか?半農半Xとは、農業と他の仕事を組み合わせたライフスタイルのことを表します。塩見直紀さんがこの言葉を提唱されたのが1993年から1994年頃。四半世紀以上経っていますが、2020年3月に閣議決定された食料・農業・農村基本計画に半農半Xの文字が盛り込まれる、2021年度には愛知県が「あいちde新日常の選択肢半農半Xな暮らしガイドー買うからつくるへー」のタイトルで冊子とホームページを作成するなど、今改めて注目を集めています。

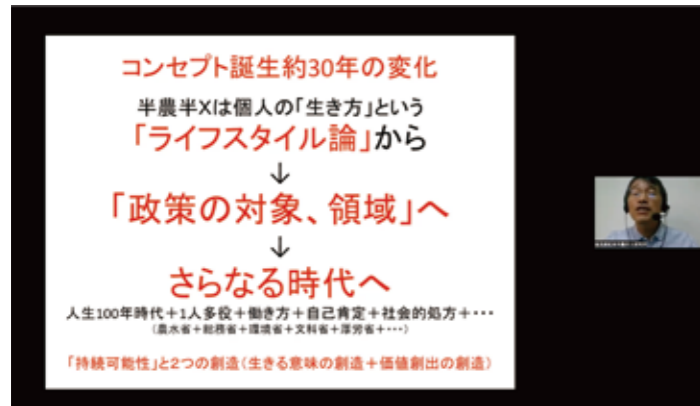
かつては経済と共に所得が向上し、都市が発展して生活が便利になることが「豊かさ」の象徴でした。お金のために働き、必要なものがあれば、お金で何でも買う。ところが近年、

そうした働き方やライフスタイルが問われるような時代になってきました。買うばかりで誰かに自分の暮らしを委ねる生き方でいいのか。こんな疑問を持った人たちが、田畑で自分の手を動かして米や野菜をつくることで充実感を得ながら、別の仕事もして地域や社会とつながる半農半Xという生き方を支持しているのだと思われます。

半農半Xは、個人の生き方の選択肢を広げるだけでなく、農業に携わる人口を増やし、山村地域への移住を増やす可能性も秘めています。そこで、おいでん・さんそんセンターは、半農半Xに興味のある方を対象にオンラインセミナーを開催しました。

実践者に聞く『農ある暮らし 天職・ライフワーク』の魅力

第1回目のオンラインセミナーは、6月10日(金)に、「はじめよう!半農半Xな暮らしDAY1~実践者に聞く『農ある暮らし 天職・ライフワーク』の魅力」と題して開催しました。



ご講演いただいたのは、半農半Xの提唱者であり、半農半Xに関する著書が台湾、韓国、中国、ベトナムで翻訳・発売されている半農半X研究所の塩見直紀さん、豊田市旭地区で養鶏と神主を組み合わせた半農半Xを実践しているてくてく農園の横江克也さん、豊田市の市街地に住み、平日は会社勤め、週末は足助地区の新盛自治区で、地元住民に教えてもらいながら農業に取り組むの有志団体Burupon (ブルポン) を立ち上げた辻竜也さんの3名です。

塩見さんは、なぜ半農半Xという言葉が生まれたかについて話されました。背景には2つのことがあったそうです。1つは、環境問題への課題意識から農業の大切さに気づいたこと、もう1つは、生きる意味をどう見つけるかという不安でした。当時の塩見さんにとって、農をやりたくても専業農家になるのはハードルが高いものでした。しかし小さく農に携わることをベースにして、他に生きがいを得られることや大好きなことを組み合わせる生き方であれば、敷居が低くなる。こうして半農半Xというコンセプトが生まれたそうです。

また、半農半Xについて書かれた著書の読者には20~40代が多いこと、このライフスタイルを求める方は、梅干しを漬けたり、味噌を作ったり、伝統文化をリスペクトし、小農志向で、発信力も高い傾向にあるので、山村地域の大きな力になると分析されていました。

横江さんは、実践者としての経験を話しました。就職活動中に、懸命に生きた愛犬を亡くし、経済的安定を優先して仕



(左) 神事を執り行う横江さん
(右) 鶏舎での横江さん

事を探す自分に嫌気がさしたそうです。そこで、命と向き合い、生きる力を身につけることができる農業を志しました。研修などを経て、2011年に旭地区の空き家に移住し、養鶏をメインに野菜栽培、お米づくりを始めました。その後、神社のお祭りで「神主やってみない?」と誘われたことがきっかけで、熱田神宮の養成講座に通い、現在では年間30~40回神主として神事を執り行っています。そもそも農業を始めるにはどうしたらいいか、養鶏と神主でそれぞれどれくらいの収入があるかについても補足して話しました。

辻さんは、足助地区の新盛自治区で週末農業をする団体Buruponについて説明しました。辻さんは、昨年、同自治区にある豊田市里山くらし体験館すげの里周辺の市民農園で、会社の組合が主催する農業体験に参加。毎月、家族ですげの里に宿泊し、地元住民から農の担い手不足について話を聞くうちに、農を通じてまちと里山をつなぐ有志団体の立ち上げを決めました。

現在22名のメンバーがいて、今年度は2,600平方メートルの耕作放棄地を活用していく予定だといいます。会社員をしながらの活動ということで、週末のようなタイムスケジュールで時間を作っているかを紹介。また「全てを捧げる必要はないので、やれる範囲で農に携わってみてはいかがでしょう」と参加者に呼びかけました。

参加者からは、「収入の話が聞けたのは大変参考になった」、「半農半Xの割合は人それぞれということ、半農半Xの



全容が短時間で学ぶことができ良かった。実践者のお話が聞けて大変参考になった」などの感想がありました。

安心と農ある暮らしの両立!? 企業版半農半X求人

第2回目のオンラインセミナーは、「安心と農ある暮らしの両立!? 企業版半農半X求人」と題し、6月23日(木)19時から行いました。

現在、豊田市内で昭和50年からカーボンプラシというモーター用部品の生産を続ける富士産機株式会社(以下、富士産機)は、下山地区で農業を営むKINOファームの協力を得て、週の半分は富士産機、あとの半分はKINOファームで働く「半農半X人材」の募集を行っています。

最初に、富士産機の社長を父に持ち、今回の求人を出発した鈴木聖人さんが、会社の概要と求人に至った経緯を説明しました。現在の従業員は20名。66歳の定年を過ぎても継続して働き続ける人が多い会社だということです。山村地域における耕作放棄地の増加が深刻だと知った鈴木さんは、仕事をする事自体が、社会課題の解決につながる働き方を作りたいと考えました。半農半Xという生き方・働き方があると知り、「小さな規模の会社だからこそチャレンジできる!」と半農半X人材の募集を決めたそうです。

report 「足助の町並みで暮らしてみたいひとを増やしたい」と実行委員が企画から取材執筆まで担う

重伝建10周年記念冊子『やっぱ足助いいじゃん!』完成

足助の町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定されて10周年を記念した冊子『やっぱ足助いいじゃん!』が完成しました。この冊子の制作は、重伝建地区選定10周年実行委員会の皆さんが、「足助の町並みで暮らしてみたいひとを増やしたい」と取材対象を選ぶところから始まりました。

内容は、「第1章 重伝建地区選定から10年を振り返って」、「第2章 足助の町並みに「住む」魅力とは」、「第3章 豊田市足助「重伝建地区選定10周年事業」でしてきたこと」、「第4章 実行委員12名の思い」、「第5章 足助の重伝建 [資料編]」で構成されています。

「そもそも重伝建って何?」を説明するページはもちろん、足助の町並みに住むご家族の暮らし、この冊子を作成してきた実行委員の皆さんの足助への想いなど、タイトルの通り「やっぱ足助いいじゃん!」がギュッとつまった一冊です。

(一社)おいでん・さんそんは、ローカルメディア縁側としてこの冊子づくりに関わらせていただき、ライター講座の実施と企画・編集の一部を担当いたしました。



次に、KINOファームの木下貴晴さんは、お米を2.0ヘクタール、野菜を0.5ヘクタールで約60種類、耕作しているということを紹介。農業と一口に言っても、米づくりであれば、水路掃除、田植え、水管理、除草、草刈り、獣害対策、稲刈りなどたくさんあると説明。体力的に負担を感じる作業もあるが、収穫の喜びが毎年得られると話しました。

7月末には、富士産機の会社・工場とKINOファームの田畑が見学でき、半農半Xで働くイメージをよりクリアにしてもらうための現地見学&説明会が実施される予定です。

2回のオンラインセミナーでは、半農半Xは個人の生き方に深みや面白みを加えると同時に、耕作放棄地の増加という社会課題も解決に導く可能性があることを学ぶことができました。セミナーをきっかけに、参加者の皆さんにさまざまな変化が生まれることを期待します。(木浦幸加)

読んでみたいという方は、「おいでん・さんそんセンター」に来所して紙の冊子を手取るもしくは「電子書籍」で読むどちらかを選べます。ぜひ、ご覧いただき、足助のまちなみを感じてみてください。(木浦幸加)

